すてきな殿方と晩餐を

都築けん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すてきな殿方と晩餐を

【Ｎコード】
Ｎ５１５４Ｃ

【作者名】
都築けん

【あらすじ】
メアリーギルを苛む〈声〉は、彼女に食事に行くことを勧める。

すてきな殿方と晩餐を

――ざぁざぁ。
ざぁざぁと雨が降っている。
部屋の中は暗い藍色に染まっている。
ソファに横になり、天井を見上げた。
ざぁざぁ。
ざぁざぁ。
雨の音以外には何も聞こえない。
いつもは賑やかな外の街路に人影はない。
雨粒が全ての雑音を飲み込む。
雨の音以外は全てが沈黙していた。
無遠慮な〈声〉はいつもそんな雨の日に話し掛けてくる。
「私は声」
――来た。
沈黙の中に混ざった異音に体をすくめる。
〈声〉の話は必ず自己紹介から始まる。
そのあたりの礼儀は弁えているものらしい。
そして二言目には、
「君は私を聞いている？」
とくるのだ。
――やめろぉ。私にかまうなぁっ。
体を丸めて、髪をかきむしる。
頭皮に爪が食い込む。

痛みは、感じない。
両の手が朱に染まった。
「君は私を聞いている？」
――いやだっ…厭だ！
――誰だ。　ダレだっ。ワタシに、どうしろとッ。
肩をきつく抱きしめ、震える。
粉雪のように白く、軟らかい双肩。
朱に染まった指先が食い込み、その雪原の様な肌に傷をつけていく。
「君は私を聞いている？」
――狂う！　狂う！　狂う！　狂うぅ…。
ざぁざぁ。
ざぁざぁ。
「君は私を聞いている？」
ざぁざぁ。
――おかしくなるぅ…。
ざぁざぁ。
「君は私を聞いている？」
「君は私を聞いている？」
「君は私を聞いている？」
――お願い。　もうやめて…。
「君は私を聞いている？」
「君は私を聞いている？」
「君は私を聞いている？」
――お願い…。
「私は君を見ているよ」
「私は君を知っているよ」
――壊れてしまう。ワタシのっ…。
「さぁ！」
「食事の時間だよ！」
「あっ」

喉が引き攣り、横隔膜が痙攣する。
腰が浮き上がり、背骨が悲鳴をあげた。
「あ、あ、あ、あ、あ」
弓なりに仰け反った体が、激しい痙攣を繰り返す。
そして、最後に大きく跳ねると―。
どっ、と崩れ落ちた。
ざぁざぁ。
――ざぁざぁ。
「：さぁ、食事の時間だよ」
ざぁざぁ。
ざぁざぁ。
ざぁざぁ。
――――。
気づくと。
何も変わらずに、雨の音以外は全てが沈黙していた。
着ていたシャツが汗でぐっしょりと濡れている。
激しい動悸。それが収まるのを待つ。
――食事の時間。
〈声〉はそう言っていたが。
――そう、食事の時間だ。
私は、食事に行かなければならない。
食事に行かなければならない！
食事にでかけよう。
――とりあえずは。
言うことを聞かない体を何とか動かすことからはじめよう。
そして、次にシャワーを浴びるのだ。
髪を乾かし、服を着て、化粧をし、家の鍵をつかんで。
――食事に出かけよう。
焦ることはない。一つ一つ、ゆっくりとこなしていけば良い。
いつもそうしてきたのだから。

「〈声〉が聞こえてくると言ったら、あなた、どう思うかしらね」
失笑をもらしながら、メアリーギルはグラス
を手にとった。
　鼻は高くも低くもなく、細い隙間にはまった美しい蒼色の瞳の上
を、端正な眉が緩やかなカーブ
を描いている。酷い癖がついた髪は、ほんのりと茶色がかった黒色
で、肩より少し下で途切れてい
る。歳は二十五、六といったところであろうか。全体的に気が強そ
うな感じの容姿は、――そういうタ
イプが苦手な男もいるだろうが――確実に特上の美人の部類に入る。
そんな女である。
　雨はまだ降りつづけている。メアリーギルは、ざぁざぁという雨
音に打ち消されない程度の小声で
話し掛ける。
　女は上品に、上品に話さなければならない、というのが彼女の信
条なのだ。
「頭の中にね、響いてくるの。ちょうどこんな憂鬱な雨の日になる
とね」メアリーギルは、グラスに注が
れた真赤な液体を遠慮がちに口に含むと、男に微笑みながら話題を
つなげる。
「もちろん、精神科のお医者様には診てもらったのよ？　…立派な
先生に診てもらったんだ。インシ
ュアエル・ナーブ・ジャーナルって雑誌に論文が掲載されたことも
あるんですって。ダルコニアで一
番大きい病院の精神科の先生なのよ」
　メアリーギルは切り取った肉に――ちょっと味が薄いかしらと、
一口目を食べた時に思ったので――
胡椒を少しふりかけ口にほうりこんだ。肉はやわらかく、非常に食

べやすかったが、やはりまだ味が
薄い気がした。
　それを飲み下して続ける。
「そうしたら、その先生、なんて言ったと思う？」
　男は微笑んだままメアリーギルを見つめ返している。
　メアリーギルは汚れた口元をハンカチ（キーシャ・ヘンネルの高級品だった）で――なるべく淑女の
ように品良く――拭うと、低い声音で、おどけながら続けた。
「貴女の症状は、いわゆる悪魔憑きというヤツですヨゥ。わたしゃ
そっちは専門じゃァないンで、祓魔
師にでも診てもらうことですナ」
　メアリーギルは端正な眉を吊り上げて、肩をすくめてみせた。
「もう私いやになっちゃたわ。本当に。挙句の果てにはそのセンセ、
コルサレムにいるとかいう祓魔
師に紹介状まで書き出すのよ」
　メアリーギルは興奮した口調でそう告げながら、肉を食べやすい
サイズに切り取ると、こんどこそちょ
うど良い量の胡椒をふりかけ、口に放り込んだ。しばらくそれをほ
おばった後、メアリーギルは味に
納得したのか、上目遣いでうなずきながらそれを飲み下した。肉を
ほおばっているあいだ沈静して
いた興奮をもう一度呼び覚まし、メアリーギルが続ける。
「あんまりにもそのセンセ、私を小ばかにしているように見えるん
ですもの。私、途中で腹が立って、
もう結構ですっ、て怒鳴って出てってやったわ」
　つい興奮しすぎて声が大きくなってしまったことに気づき、メア
リーギルは押し黙った。
眼前の男は、そんな彼女をやさしく見つめている。
「ごめんなさい、私。よっぽどあの先生のことが気に入らなかった
のね」

メアリーギルは男から視線をそらすと、しばらく手にもったナイフとフォークを見つめた。彼女は音を立てないようにそれを慎重におくと、またハンカチで口元を――今度もなるべく淑女のように品良く――拭った。

メアリーギルは、男の目をじっと見つめると、唐突に身を乗り出して男に口付けした。情熱的に、深く、長く、長く。舌と舌を縺らせながら。

口をはなし、しばらく口付けの余韻に浸ったあと、メアリーギルは「貴方って本当に紳士なのね、フレデリック」と男に向かって微笑んでみせた。

「私をイカれた女だなんて思わないで。私、貴方にそんな風に思われたら、きっと死んじゃうわ。でもね〈声〉が聞こえるっていうのは本当なの」そこまで喋り、そしてふと気づく。

メアリーギルが無理やり舌をねじこんだせいで、男――フレデリックの笑みが壊れてしまっていた。唇がゆがんでいる。

メアリーギルは、その細い指でフレデリックのゆがんだ唇をもとの笑みの形に戻すと、満足そうにうなずいてみせた。床の上に仰向けで転がっているフレデリックの顔には、先ほどまでと何一つ変わらない微笑が浮かんでいる。

そんな彼の上に跨りながら。

「やっぱり貴方には笑顔が似合うわね。フレデリック」

メアリーギルはざぁざぁという雨音に打ち消されない程度の小声で上品にそう呟くと、フォークとナイフを再び手にとり、嬉々として喰い散らされたフレデリックの肝臓の征服にとりかかった。

（終わり）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5154c/

すてきな殿方と晩餐を

2010年12月30日19時36分発行